

イザヤ書23章「諸国の商いの場」

1A 諸国の商いの場 1-5

2A 海辺の住民の泣き叫び 6-9

3A タルシシュへの移動 10-14

4A 七十年後の遊女 15-18

本文

イザヤ書 23 章を開いてください。私たちの学びは、前回、バビロンが崩壊する幻から見てきました。そして、エドムのドマに対する預言と、アラビアに対する預言があり、「幻の谷」と呼ばれるエルサレムに対する預言がありました。そこにある共通した課題、主から指摘されていたことは、「物心的なものに溺れる」ということです。バビロンは、大宴会をして神々を賛美する中で、メディア・ペルシアに滅ぼされました。エドムは、アッシリアの危機があったけれども、主なる神のことは度外視していました。アラビアは、部族間で互助関係があったのですが、やはり主に向かいませんでした。そして、エルサレムは、これだけ幻、神の預言が与えられているのに、主ではなく、自分の生活で忙しく、また危機が来て防備は固めているけれども、主には向かわず、ついにアッシリアに取り囲まれて、「明日はどうせ死ぬのだから、飲み食いしよう。」となりました。

このような、物理的なことにより頼んだり、物質主義に陥っている各国ですが、次 23 章に出てくる、ツロという町は、人々を安定させ、安心させる富が集中しているところでした。世界で富を動かしていたツロに対する、神の裁きの宣言です。



¹ <https://jbpres.ismedia.jp/articles/-/53774>

ツロは、一般には、ティルスという名で知られています。今のレバノンの南部に、その遺跡があり、ユネスコに世界遺産指定されています。地中海の東岸に、フェニキア人が住んでいました。民族的には、セムの子孫のようですが、そこはカナン人の地であり、カナン人の文化を引き継いでいます。そしてこの彼らが、地中海を舞台にして海上交易で栄えました。その交易路の地図がありますが、北アフリカから今のイスラエル、エーゲ海に面したトルコ、それからなんと、黒海にまで交易路を広めています。さらに西に行けばギリシア、イタリア、スペイン、そしてイギリスにまで及んでいます。古代の地中海の世界はローマではなく、フェニキアによって築き上げられたといつてよいです。

彼らは、紀元前 12 世紀辺りから、地中海の物流をほぼ独占するようになり、その沿岸にいくつもの植民市を形成しました。ツロは、今のシンガポールやドバイのような都市国家であります。この地中海全域に、植民市をもって中継点としていました。そして、海軍も持ち、地中海はツロの海軍によって仕切られていたので、大国が来ても蹴散らすことができたのです。

そして、商品はあらゆるものが取引されていましたが、代表的なのはレバノンの杉です。聖書にも数多く出てくる杉ですね。そして、染料もあるし、象牙や貴金属もありますし、必要物資のみならず、それ以上に、貴族階級の人々にとって必要な、贅沢品が多かったのです。エゼキエルの預言には、これらの商品が名を連ねています。

そういうことで、聖書では、歴史的にも、預言の中にも数多く、ツロが出てきます。ダビデが王となった時に、その王宮を建てるためにツロの王ヒラムが、杉材や職人たちを送っています。そして、ソロモンが王になってからも、ヒラムは、神殿を建てるために大量の杉の木と、職人たちを送っています。他の周囲の国々と異なり、交易の相手ではあっても、敵対することはありませんでした。

ところが、霊的には大きな挑戦となります。フェニキア人は、文化的にカナン人の慣わしを受け継いでいます。イスラエルの王アハブは、ツロのそばにある町でシドンがありますが、その王の娘イゼベルを自分の妻としました。そのために、バアルがイスラエルの中にどっと入りこんでいったのです。それで、ご存じのようにエリヤが、バアルの預言者たちとカルメル山で対峙したのです。その前に、飢饉が起こった時にエリヤは、主によってシドンに呼ばれて、そこにいるやもめと息子の家に泊って、パンのための粉と油が尽きなかったという奇跡を行いましたね。そして、新約時代は、カナン人の女が、娘が悪霊にとりつかれているので追い出してほしいと懇願したのを、覚えていますね。パンくずを犬は食べますと言った女です。

話を戻しますと、これだけ地中海の全域に覇権を持っていて、無敵であるように思われたツロですが、このツロが倒れていく預言が、ここのイザヤ書、エレミヤ書、そしてエゼキエル書にあります。アッシリアが包囲して攻め、次にバビロンがなんと、13 年間も包囲します。そして、ギリシアのアレクサンドロスも攻めます。この二つ、バビロンの包囲とギリシアの包囲を連続して預言しているの

が、エゼキエル 26 章です。バビロンは包囲したものの、ツロの人々は海洋は全く自由ですから、そこで物資が入ってきます。そして彼らは、沖合に数百のところにある島に移り住みます、バビロンが攻め取った時に、何も分捕り物がありませんでした。しかし、アレクサンドロス、バビロンによって破壊された瓦礫を海に投げ入れて、埋め立てます。そうやって島に近づき、ツロを倒したのです。それで、今のツロの遺跡は、半島のようになっています。けれども実は自然の半島ではなく、埋め立てた人口の半島であることが、後で分かりました。

このように、地中海を制覇していたツロが滅ぼされたのが、主ご自身なのだということを示しています。そして新約聖書では、黙示録 18 章にバビロンに対する、神の裁きの宣言の中で、ここイザヤ 23 章にある預言にかなり重なっています。ツロに起こったことが、終わりの日のバビロンの都にも起こるということです。

1A 諸国の商いの場 1-5

¹ ツロについての宣告。タルシシュの船よ、泣き叫べ。ツロは荒らされて家もなく、そこには入れない。キティムの地から、それは彼らに示される。

「タルシシュの船」に対して呼びかけています。タルシシュは、おそらく今のスペイン北部にある町で、鉱石で有名だったところではないかと言われています。ここは、当時の世界でもっとも遠くに航行することができる船として、「タルシシュの船」と呼ばれているわけです。地中海交易を制覇している、象徴的な船です。ツロが荒れ果てたのを見て、泣き叫んでいます。「キティム」とはキプロスのことです。地中海に浮かぶ、ツロの近くにある島ですね。そこからツロがなくなったことを嘆いています。

² 海辺の住民よ、黙れ。海を渡るシドンの商人はおまえを富ませた。

海辺の住民とは、ツロに住む人々です。今、ツロで起こっている悲劇を見なさい、だから黙りなさいと呼びかけています。それから、シドンは、ツロの北にある町です。ツロと対に出てきます。シドンの商人の働きで、ツロが豊かになっていました。

³ 大海原で、シホルの穀物、ナイルの刈り入れがおまえの収穫となり、おまえは諸国の商いの場となった。

エジプトを相手に貿易していました。ここから穀物が、ナイルの刈り入れが来ていたのです。エジプトと言えば、長いこと超大国の座を占めていたところですから、そこからの穀物が来ているのですから、ツロは、まさに「諸国の商いの場」になっていたのです。ここが、預言の中心です。ここが、世界の交易の中心地になっており、富が集中していたということです。

⁴「シドンよ、恥を見よ」と海が言う。海の砦がこう言っている。「私は産みの苦しみをせず、子を産まず、若い男を育てず、若い女を養ったこともない。」⁵ このうわさがエジプトに達すると、人々はツロのうわさを聞いて、激しくもだえる。

ツロには労することなく富が集積されていったのです。産みの痛みもない、男の子、女の子を育てて養ったことがない。日々の煩いがなく、いつもバケーションのような生活があったら楽しいですね！しかし、育てていくという労苦なしで生きていくことには、命がありません。そして、痛みがないところには高ぶりがあります。

私たちは、いつの間にか効率の良いこと、楽にできること、そういったものを選ぼうとしてしまいます。しかし、キリストの道、また神の命は、愛があり、労苦があるところにあります。イエス様は、「貧しい者が幸いである」「悲しむ者が幸いである。」と言われました。私たちは何かにつけ欠乏している、事足りない、つぶされるというところに永遠の命があり、それゆえ喜びがあるのです。

そのような、神の中にはない富、楽しみは、いかにはかないものでしょうか。このように、滅んでしまうのです。今、エジプトはツロが倒れて、激しくもだえています。この悲しみは、慰めに至るのが、神のうちにある悲しみです。しかし、世の悲しみは滅びに至ります。

2A 海辺の住民の泣き叫び 6-9

⁶海辺の住民よ、タルシシュへ渡って、泣き叫べ。⁷これが、おまえたちが誇りとした町なのか。その起こりは古く、人々はその足で遠くに行き移り住んだのに。

ツロの人々に、タルシシュに渡りなさい、そこで泣き叫びなさいと呼びかけています。ツロを中心にした交易が崩壊するからです。古から栄え、誇りとしていた町です。わざわざ、遠くからそこに移り住んでいたのです。

⁸だれが、王冠を戴くツロに対して これを凶ったのか。その商人は君主たちで、その貿易商は地で最も尊ばれていたのに。

ツロは、諸国と交易を持っていて、諸国の王たちはまるで商人のように動いていました。終わりの日のバビロンも、大淫婦の客相手は、地の王たちでありました。そして、貿易商こそが最も尊ばれていて、黙示録 18 章でも、貿易商が嘆く姿が出てきます。このようにツロは、王たちも動かす「王冠を戴く」ものだったのです。しかし、その荒廃を凶ったのは誰なのか？と問っているわけです。

⁹万軍の主がそれを凶り、すべての美しい誇りを汚して、地で最も尊ばれている者をみな卑しめられた。

主ご自身なのです。箴言にあるように、高慢は破滅に先立ちます。したがって、その人が倒れる時はとても見るに堪えないものです。そして富は、私たちが神以外のものに頼らせる高ぶりを形成します。「1テモテ 6:17 今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、」

3A タルシシュへの移動 10-14

¹⁰ 娘タルシシュよ、ナイル川のように自分の国にあふれよ。もうこれを制する者はいない。¹¹ 主は御手を海の上に伸ばし、王国を震わせた。主はカナンについて命令を下し、その砦を滅ぼし尽くした。

タルシシュの町に、一気に避難民が押し寄せます。そして、主が御手を地中海の上に伸ばして、ツロの王国を震わせました。カナンとあるのは、ツロの地域のことです。そこに命令を下されて、砦を滅ぼされました。具体的には、アッシリアの攻撃を指していますが、おそらく、この預言は、その他に、バビロンそしてギリシアによる攻撃も包括しているのではないかと思います。

¹² そして言われた。「もう二度と喜び躍るな。虐げられたおとめ、娘シドンよ、立ってキティムに渡れ。そこでも、おまえは休めない。」

キティムは、キプロスのことです。シドンの人々には、そこに渡れと言います。ただ、そこでも休まることはありません。

¹³ 見よ、カルデア人の地を。この民はもはや存在しない。アッシリア人がこれを荒野の獣のものとして定めた。彼らは、自分の見張りやぐらを立て、宮殿をかすめて、そこを廃墟とした。¹⁴ タルシシュの船よ、泣き叫べ。おまえたちの砦が荒らされたからだ。

カルデア人の国とありますが、これはバビロンのことです。バビロンと言っても、まだ小国の時で、アッシリアに対抗していたメロダク・バルアダン(39:1)という王です。アッシリアによってバビロンが荒らされたのですが、その同じアッシリアがツロの砦を荒らすと宣言しています。

ツロに対する、その高ぶりを破壊する預言は繰り返されています。アッシリアの後に、バビロンが来てこれを破壊します(エレミヤ 47:4)、そしてバビロンの後に、ギリシアの王アレクサンドロスが来て、徹底的に破壊しました(エゼキエル 27-28 章)。これが、イエスを自分の救い主と認めていない世であります。世と世の欲は滅び去るのです。

4A 七十年後の遊女 15-18

¹⁵ その日になると、ツロは七十年の間忘れられる。一人の王の生涯ほどの期間である。七十年が

終わると、ツロは遊女の歌のようになる。¹⁶「豎琴を取り、町を巡れ、忘れられた遊女よ。うまく弾け、もっと歌え。思い出してもらうために。」

遊女も七十年経てば、老女になりますね。自分で呼び寄せて、自分の客を探している歌が、この歌です。おそらくこの七十年は、アッシリアがツロを攻めたが、アッシリアがバビロンにとって代わった時に独立を回復した期間のことと思われます。再び貿易を開始するのですが、これまでと違い、富の蓄積がそれほどできなくなることを示しています。

¹⁷ 七十年の終わりに、主はツロを顧みられる。彼女は再び遊女の報酬を得て、地のすべての王国と、地の面で淫行を行う。¹⁸ その儲け、遊女の報酬は、主の聖なるものとなる。それは蓄えられず、積み立てられない。その儲けは、主の前に住む者たちが食べて満ち足り、上等の衣服を着るためのものとなるからだ。

これは、かつてソロモンの神殿のために、ツロの杉材や建築士などが用いられましたが、再びそのように主の御用のためにその富が用いられる時が来る、ということです。エズラ 3 章 7 節に、バビロンから帰還したユダヤ人の建てる神殿再建に、ツロとシドンから来た人々がいることが言及されています。主の聖なるものとして使われるようになりました。

これは、この世の富は最終的には主のところに持っていかれることを示しています。主に属している富が、正しく主にお返しするという状態に回復するのです。終わりの日、キリストが御国を立てられる時は、エルサレムに国々の富が運ばれてきて、それで主へのささげ物となります。

私たちはそれを、今の時代にも、献金という形で行いなさいと命じられています。不正の管理人の喩えで、イエス様はこのように言われました。「ルカ 16:9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」つまり、私たちの持っている具体的な財産、それを永遠の住まいのために積極的に用いていきなさいということです。いずれ主が再臨されたら、物理的に世界の富が主のもとに動いていきます。

私たち人間が主のところに行かせまいとする、その高ぶりは、自分が持っている物があるからだということが分かったかと思います。そのために、主はアッシリヤのような人に恐れを呼び起こすようなものを用いられます。心に出てくる不安、これは主に拠り頼むことのできる良い機会です。しかし、その機会を失うとそこには破滅しかありません。その破滅を予期して、21 章、22 章の預言では、イザヤは嘆き悲しんでいました。一人の人が、滅びにいたる悲しみに陥ることを願わず、私たちは嘆きます。その滅びから、一人でも多くの人が救われるように、主に叫び求めます。

History has known a number of small countries—some of them little more than city-states—that have had a disproportionate influence because of their possession of fine harbors and strong commercial instincts and skills. Venice, Genoa, and the cities of the Hanseatic League are examples from the past, while Singapore and the Netherlands, with its great port of Rotterdam, are modern examples. Phoenicia, with its two important ports of Tyre and Sidon, was the maritime commercial state contemporary with much of OT history. Like all Israel's and Judah's neighbors, of course, it was pagan; and the worship of Melkart, the Tyrian Baal, had posed a serious religious threat in the days of Ahab and Jezebel. Mauchline (in loc.) writes "The Phoenicians, with their accumulated wealth and their blatant materialism, represented the very type of culture against whose vices Amos in particular warned the Israelites." Until the time of the Assyrians, who had designs on the whole Mediterranean seaboard and its hinterland, this small state and its important commercial cities had been left relatively undisturbed by conflict. It certainly merited judgment, however, and would have to experience this at the hands of the Assyrians, just as other states in the area were to face. It was Sennacherib, during the period 705–701 B.C. who turned his attention to Phoenicia, which had been a nominal part of the Assyrian Empire for some time. The country was devastated, and Tyre itself was subjected to a long and bitter siege. It was later also besieged by the Babylonians, the Persians, and the Greeks under Alexander the Great, who virtually destroyed it in 333 B.C. after one of the greatest sieges in history. It may be that the prophecy, in terms of its fulfillment, incorporates elements from some of these later times as well as the time of the Assyrian onslaught.²

in loc. *in loco*, in the place cited

² Grogan, G. W. (1986). [Isaiah](#). In F. E. Gaebelin (Ed.), *The Expositor's Bible Commentary: Isaiah, Jeremiah, Lamentations, Ezekiel* (Vol. 6, pp. 145–146). Zondervan Publishing House.